

## 喜ぶということ

善い念の代表は、慈愛、大悲、随喜、捨身の四つです。これを「四無量心<sup>しむりょうしん</sup>」といいます。真言宗の重要な実践項目です。「慈・悲・喜・捨<sup>じひきしや</sup>」と覚えてください。

第三番目の「随喜<sup>ずいき</sup>」とは、他人の喜びごとを自分の喜びとすることです。祝いごとや功績、善行に参加して、共に喜び、その徳を広く人々に伝えることです。

たとえ自分と世界が異なり、ライバルであっても、美德は賞賛し、活かすべきです。「隣に倉が建てばこちらは腹が立つ」。これはねたみです。他人の欠点をあげつらうクレーマーは、相手を消極的にさせてしまいます。むしろ、相手の長所を見つけ出して、その才能をのびのびと活かせる人こそ、立派な指導者といえましょう。仏典に、「随喜する人はその成功者よりも大きな徳を積む」と説かれています。それほど、他人の喜びをすなおに受け容れることは、凡人には難しいことなのです。

随喜は、周囲に明るい雰囲気を広げていきます。個性がのびのびと育つ環境は、随喜の精神によって作られていきます。歡喜は活動を滑らかにします。

随喜の精神は平等観に立ち、嫉妬を離れた清らかな心のあらわれです。寛大な心を持ち、隣人の幸福をすなおに喜びたいものです。

喜べば喜びごとが喜んで

喜びもちて喜びにくる